

遙かなる発展の途上で - SELHi への道標 -

広島市立舟入高等学校  
外国語(英語)科 西 巖弘

(1) 優れた土台 【現在完了進行形】(The Present Perfect Progressive)

創立 58 年の伝統を誇る広島市立舟入高等学校の輝かしい歴史の中であって、今年(平成 18 年)普通科・国際コミュニケーションコース(「国際コース」)は、設立して 9 年目を迎える。さらに平成 16 年度より、「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール(SELHi)」として文部科学省からの指定を受けて、これから研究開発の最終年度である 3 年目を迎える。

SELHi は、わが国の政府が掲げる「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」の一環として行われている中・高等学校における四つの施策うちの一つである。文部科学省は、英語教育において優れた取り組みを行う高等学校について、応募のあったものの中から毎年 30 校程度、最終的には全国でおよそ 100 校を研究開発学校として指定する予定である。SELHi 校は、研究のための予算と教育課程上の特別措置を許される。その一方、3 年間の研究開発を行い、「現場での実践」を通して得られた成果と課題を整理し、研究結果を広く全国に普及する義務を負う。

全国の指定校の数から考えれば、学校全体で「英語の甲子園」に出場するような荣誉でもある。

現在、外国語(英語)科は、この SELHi 研究開発校の指定を受けて以来、いくつもの壁にぶつかりながらも、他教科の方々の協力を得て、学校全体での支援を頂くことで、研究の体裁をどうにか整えながら、最終年度を迎えつつある。

しかしながら、この SELHi の推進に関しては、研究開発校の指定を受けてからの努力奮闘もさることながら、それ以前の「なにも特別なことのない状態」での粛々としたスタッフ全員の取り組みの中で醸成されてきた『舟入高の英語教育』という「優れた土台」が無ければ成り立たなかったということも忘れてはならない事実である。

したがって、これからの本校の発展を考えると、この「優れた土台」の上に成り立つ発展の姿をはっきりと見据えるためにも、本稿では以下の 2 点について意義付けをしておきたい。

『舟入高の英語教育』とはどのようなものであったのか…(2)へ

『舟入高の英語教育』がどのようにして SELHi へと繋がったのか…(3)へ

(2) SELHi 以前の『舟入高の英語教育』 【大過去】(The Past Perfect)

- A . 平和都市ヒロシマの「国際コース」のある学校

そもそも、人類最初の被爆地である広島市の市立高等学校である本校には、とりわけ「国際コース」を有する学校として「平和の願いを世界に発信できる人材の育成」が求められてきた。このような人材に求められるのは、「語学力」はもとより、異文化間のコミュニケーションの基礎となる「国際関係の知識」や「論理的な思考力」、そして何よりも豊かな「感性」と「人間性」に裏付けられた「思いやり」や「責任感」である。ともすれば巷では「国際化の時代」、「国際人を育てる」などの言葉が頻りに用いられつつも、その抽象的な言葉のイメージが具体的な取り組みに昇華することはなかなか容易ではなかったであろう。しかし、少なくとも「国際コース」を設立された先人のご意志は、すでに SELHi 以前から「国際コース」の生徒が発揮する語学力、知識と思考力に裏付けられた進路実績、そして主体的な

意欲を持ち続け積極的に社会参加を行う卒業後の活躍などに結実しているといえる。このような人材の育成に『舟入高の英語教育』が大きく係わってきたことは間違いない。

- B . 教育課程の変遷 単位数が減るといことは…

「国際コース」の設立に際して、その当時(平成9年頃)これに係わられた先生方は、平和都市ヒロシマの使命を明確に意識しつつも、具体的な教育内容、教育課程について、随分と頭を悩まし、苦労、苦心されたと聞く。とりわけ、既に「英語科のある学校」あるいは「国際科のある学校」として軌道にのっている県外の高等学校を訪れ、その事例を参考にしながらも、本校の実状に見あった教育課程を策定されたという地道な取り組みには頭の下がる思いである。

表1. 英語科 教育課程の変遷

コース	科目	平成16年度入学				平成15年度入学				平成14年度入学				平成13年度入学			
		1年次	2年次	3年次	計	1年次	2年次	3年次	計	1年次	2年次	3年次	計	1年次	2年次	3年次	計
普通	1 英語	3			3	3			3	4			4	4			4
	2 英語		3	(2)	3		3	(2)	3		3	(2)	3		3	(2)	3
	3 オラルコミュニケーション	3			3	3			3	2			2	2			2
	4 オラルコミュニケーションA				0				0				0				0
	5 リーディング			4/3	0			4/3	0			3	3			3	3
	6 ライティング		2	2	4		2	2	4		2	2	4		2	2	4
	必修の合計	6	5	6/5	17/16	6	5	6/5	17/16	6	5	5	16	6	5	5	16
国際	1 英語	3			3	3			3	3			3	3			3
	2 英語		3		3		3		3		3		3		3		3
	3 オラルコミュニケーション	2			2	2			2	2			2	2			2
	4 オラルコミュニケーションB				0				0				0				0
	5 英語表現		2	(2)	2		2	(2)	2		2	(2)	2		2	(2)	2
	6 外国事情				0				0			(2)	0			(2)	0
	7 LL演習				0				0	1	2	(2)	3	1	2	(2)	3
	8 総合英語	2			2	2			2	2			2	2			2
	9 英語理解			3	3			3	3			3	3			3	3
	10 総合英語			2	2			2	2			2	2			2	2
	11 コミュニケーション			1	1			1	1			2	2			2	2
	12 時事英語			(2)	0			(2)	0				0				0
	13 異文化理解		2		2		2		2				0				0
	14 英語一般				0				0			(2)	0			(2)	0
	15 コピュータ・LL演習			(2)	0			(2)	0				0				0
	16 通訳演習			(2)	0			(2)	0			(2)	0			(2)	0
必修の合計	7	7	6	20	7	7	6	20	8	7	7	22	8	7	7	22	

コース	科目	平成12年度入学				平成11年度入学				平成10年度入学			
		1年次	2年次	3年次	計	1年次	2年次	3年次	計	1年次	2年次	3年次	計
普通	1 英語	4			4	4			4	4			4
	2 英語		3	(2)	3		3	(2)	3		3	(2)	3
	3 オラルコミュニケーション	2			2	2			2	2			2
	4 オラルコミュニケーションA				0				0				0
	5 リーディング		2	2	4		2	2	4		2	2	4
	6 ライティング			4	4			3	3			3	3
	必修の合計	6	5	6	17	6	5	5	16	6	5	5	16
国際	1 英語	3			3	3			3	3			3
	2 英語		3		3		3		3		3		3
	3 オラルコミュニケーション				0				0				0
	4 オラルコミュニケーションB	2			2	2			2	2			2
	5 英語表現		3	(2)	3		3	(2)	3		3	(2)	3
	6 外国事情	2		(2)	2	2		(2)	2	2		(2)	2
	7 LL演習	1	2	(2)	3	1	2	(2)	3	1	2	(2)	3
	8 総合英語				0				0				0
	9 英語理解			4	4			4	4			4	4
	10 総合英語			2	2			2	2			2	2
	11 コミュニケーション			2	2			2	2			2	2
	12 時事英語			2	2			2	2			2	2
	13 異文化理解				0				0				0
	14 英語一般				0				0				0
	15 コピュータ・LL演習			(2)	0			(2)	0			(2)	0
	16 通訳演習			(2)	0			(2)	0			(2)	0
必修の合計	8	8	10	26	8	8	10	26	8	8	10	26	

英語のことに限って述べるなら、「普通コース(普通科普通)」の教育課程が、近隣のいわゆる公立進学校に則して標準的でシンプルなものであるのに対して、「国際コース」の教育課程は、「外国語(英語)」と「英語(専門科目・学校設定科目)」という2教科からなる。とくに「英語」は、専門科目と学校設定科目からなるという性質上、教科書出版社のいわゆる「マニュアル」のようなものはない。したがって、担当者はその科目のねらいと生徒の状態を考慮した上で常に独自のシラバスを考案しなくてはならない。

またこのような事情があるので、「英語」の授業は指導する先生の「味」や「色」を反映しつつ、「手作りのあたたかさ」あるいは「職人の技」を介して現在まで継続しているといえる。

現在までのところ「英語」の歴史はわずか8年である。しかし、この8年の間には、国立大学の入学試験で5教科7科目が課されるなどの変化があり、入試に対応する教育課程の変更を迫られたのである。「専門科目」のおかれた環境は厳しく、「英語」の単位数は、平成10~12年度には18単位であったが、平成15年度には12単位へと大幅に減ることとなった(表1の太枠内が「専門科目」)。

あまりにも当然ながら、カリキュラムについて考えるとき、どの教科も「単位数」の問題に関しては極めてセンシティブである。本校であれば週32単位という限られた時間を、戦略的かつ調和的に分け合うのであるから、「学校経営目標」、「求められる人物像」、「受験や進路」、「生徒の希望」、「教科の利害」・・・など無数の、互いに混ざり合うことのない事情が、まさに「奇跡的な配列」で織り込まれている。

しかし、「専門科目の単位数が少ない」という状況下では、「国際コース」の生徒を『英語漬け』にすることに苦勞をする。生徒は「英語が話せるようになりたい」、「英語では負けたくない」という気持ちで入学してくる。少なくともこういった「見上げた志」を「笑顔での卒業」へと繋げるべく心を砕いてしまうのは教師としての自然な理性である。

表2 受験指導のシラバス 外国語(英語)科 平成15年度

月	1年			2年			3年		
	模擬試験	活動	教材	模擬試験	活動	教材	模擬試験	活動	教材
4	・スタディーサポート				・週末課題開始 ・火曜SHRテスト開始	・長文と文・作・語法の20章 ・即戦ゼミ		・土曜ゼミ(長文・文法)開始 ・リスニング対策補習開始	・基礎英文問題集講義 ・文法問題集(市販)
5	・オリエンテーション合宿	・週末課題開始	・SIGNAL(長文の市販教材)				・全統マーク ・全統記述		
6	・全統高1模試	・火曜SHRテスト開始	・コンパクト英語構文	・全統高2模試			・進研マーク		
7	・進研総合学力テスト			・進研総合学力テスト			・進研記述	・夏季合宿(二次CT講座) ・夏季補習(CT対策)	・合宿テキ(自作) ・CT過去問集(市販)
8	・全統高1模試	・夏季補習	・夏課題問題集(市販)	・全統高2模試	・夏季補習(模擬試験対策)	・模範過去問	・全統マーク	・夏季補習(二次対策)	・夏季テキ(自作)
9					・週末課題 ・火曜SHRテスト	・Reading Cruise ・即戦ゼミ	・全統記述 ・ベネッセ駿台マーク		
10				・駿台ハイレベル			・ベネッセ駿台記述 ・全統記述	・目的別授業開始(二次・CT)	・二次・CTテキスト(自作)
11	・進研総合学力テスト ・全統高1模試			・進研総合学力テスト ・全統高2模試			・全統マーク ・ベネッセ駿台ブレ ・広大オープン ・全統ブレ		
12		・冬季補習	・冬課題問題集(市販)		・冬季補習(模擬試験対策)	・模範過去問		・特別時間割(CT講座) ・冬季補習(CT講座目標得点別)	・CTテキスト(市販)
1	・学研ハイレベル模試	・リスニング対策 ・単語 熟語などの対策 ・長文読解	・リスニングテキスト(市販) ・語彙テキスト(市販) ・長文テキスト(市販)	・進研総合学力テスト	・週末課題 ・火曜SHRテスト	・Reading Cruise ・即戦ゼミ3	・北予備(元旦)模試 ・センター試験	・特別時間割(CT講座) ・冬季補習(CT講座目標得点別)	・CTテキスト(市販)
2				・代ゼミハイレベル ・進研センター早期			・私大一般 ・二次前期	・二次対策講座(総合・英作・リスニング)	・総合テキスト(自作) ・毎年出る英作文(市販) ・リスニング対策(過去問)
3	・スタディーサポート	・学習合宿	・模試(2年)対策テキスト	・スタディーサポート	・春季補習(模擬試験対策)	・模範過去問	・卒業式 ・二次中期 ・二次後期		

- C . 受験のための指導 生徒に合わせるのか？伝統を守るのか？

もし伝統というものがあればだが、受験のための指導において「伝統」は言いかえれば、どの時期に何を指導してきたかという「前例」や「慣例」に従うことである。最もわかりやすいのは、『どの時期に、どのような受験参考書や問題集を与えるか』を前任者から引き継ぎ、忠実に再現することである。

一方、入試制度の変化、学区の再編、若年人口の減少など教育を取り巻く環境の変化により、本校に入学する生徒の「実態」も年ごとに一様ではない。模擬試験の結果に基づけば、近年は「普通コース」、「国際コース」ともますます英語の得意な生徒が入学するようになってきているようである。「実態」が変化すれば、それに応じた対処が必要なのは当然である。しかし、その「変化に即応し、全体で取り組む」というのは、確かに当たり前の配慮には違いないが、現実には頭の中で思うほど容易くはない。

SELHi 以前、受験指導について教科内でどのような認識が持たれていたかは、表 2 の「受験指導のシラバス」に垣間見ることができる。今後、SELHi での経験を通して、この「どの時期に何を与えるか」は、確実に何らかの改善、改良を受けることになる。

あくまでも指導の中心は教科書である。ここでもう一度「受験指導」に焦点を当てるなら、教科書に比して種々雑多な内容・形式の中から選べるという点で、「受験参考書・問題集」は、生徒と教師の間の特別なマニュアルとして機能する。すなわち学習すべき素材そのものであると同時に、今何を重視して学習すべきかを互いに確認する意味を持つ。

どのような参考書や問題集を選んで生徒に与えるかは、間違いなく教師の「生徒観」・「教材観」・「指導観」を反映する。受験という人生の一大事に臨んで、その結果の重大さを考えると、「前例」や「慣例」に従うだけでも、また生徒の「実態」に合わせるあまり「受験の水準」から乖離してしまってもだめである。

結局のところ、明確な方法や基準があるとは言えないが、生徒の未来を想いつつ、逃れることのできない「競争」に勝たせてやろうと心を砕く、そういった必死な想いの中にバランスの取れた選択肢が隠れているということか。

(3) 『舟入高の英語教育』を全国区の SELHi へ 【過去】(The Past Tense)

- A . 本当にこれでよいのか 現状把握から導かれた課題

もともとは受験のための指導である。本校では、毎年およそ 85% の生徒が国公立大学への進学を希望している。進学校の使命として、希望進路の実現を願う生徒の思いを叶えるため、その手立ては、「明確な目標」を「確実な行動計画」の中で夢を具現化するものでなくてはならない。

一方、受験は明らかに「競争」という側面を持つため、全国の受験生が一律に努力奮闘するという中で、「他校の生徒に負けず劣らずがんばる」という点を押さえながらも、常に「勝つために何をするか」という点において「効果的なオリジナリティー」を発揮した方が有利である。

そして、「効果的なオリジナリティー」のある指導とは、「今何がうまくいって、何が不十分であるか」をしっかりと把握した上で弱点を補強し、得意分野を伸長するという、ともすれば極めて単純なプロセスの中でも、「競争」に勝てるクオリティーをいかにして生み出すかということである。言いかえると、「現状の把握」、「生徒の実態」の中に浮き出るイメージの隅々を、どれほど深く心を込めて見つめていくかにかかっている。

(表 3 のあとに続く)

表3 「魅力ある教科」への指針 外国語(英語)科

大題目	小題目	現状	(+)
受験	1) 希望進路の実現	国公立大学 希望82% 入学35%(02年度生)	年次進行で、国公立大学合格者数増加 英語科の貢献度 2)に依存
	2) 進路実現への貢献	センター(CT)英語平均得点率 71%(326人、02年度生)	生物 A 74%(17人)、政経 72%(16)を除き、 数学 A 63%(291)、B 49%(248)、国語 54%(315)に勝る
	3) 学習時間	スタディーサポート 1年 平日39分(昨年41分)、休日57分(54分) 2年 平日48分(41分)、休日75分(57分) 3年 平日46分(38分)、休日77分(54分)	年次進行で家庭での学習時間を増加させている
	4) 模擬試験	1年 全統8月 55.6(393名) 昨年55.5(394) 2年 全統8月 55.3(390名) 昨年53.3(290) 3年 進研マーク6月 54.1(329名) 54.8(353) 進研記述7月 55.7(338名) 56.3(340) 全統マーク8月 53.2(314名) 54.3(352) 全統記述5月 51.7(355名) 50.6(356)	1・2年では、成績の維持あるいは伸長 3年では、単位数の減少に関わらず、偏差値を維持している
	5) 補充授業	1年 長期休業中の実施(夏期・冬季) 2年 長期休業中の実施(春季・夏期・冬季) 3年 文法・リスニング・長文二次対策(平日)、長文・文法(土ゼミ)、 長期休業中の実施(春季・夏期・冬季・直前)	3年「土ゼミ」は、参加度とCT得点に比例関係(H 15年3月卒業アンケート) 3年次の単位数減に関わらず、偏差値を維持
	6) 英語小論文	主として3年生対象、校内の小論文指導プログラム&個別対応の指導	全校の小論文指導&大学別の個別対応で成果を上げてきた
	7) 課題 & 小テスト	1年 週末プリント・構文テスト・リスニングテスト・学習ノート(単語テスト・作文ノート) 2年 週末プリント・単語テスト・金曜テスト(スパークテスト) 3年 週末プリント・金曜テスト・英作テスト	学習の習慣化に貢献している「量」による保障 3) 学習時間に貢献
	8) 中高の橋渡し	1年生担当者の取り組み	英語に意欲的な生徒の増加(入学時の成績)
国際	1) 希望進路の実現	国公立大学 入学26名(希望者の7割、02年度)	外語系、国際関係系の進学に有利
	2) 進路実現への貢献	CT平均得点 175.6(87.8%、02年度)	CT、二次・私大とも断然有利 傾斜配点なら、なお一層
	3) 模擬試験	1年 全統8月 147.1点(41名) 校内122.7 全国102.7 2年 全統8月 128.1点(40名) 校内106.7 全国 88.5 3年 進マ6月 150.8点(31名) 校内116.3 全国100.9 進研記述7月 127.0点(35名) 校内 88.8 全国 66.7 全統マーク8月 168.5点(35名) 校内136.8 全国124.5 全統記述 5月 108.2点(35名) 校内 75.0 全国 68.6	全国偏差値で、平均点偏差値60~65をポイントを維持
	4) 専門科目	1年 総合英語(必修) 2年 英語表現(必修) 3年 英語理解、総合英語、コミュニケーション(必修) 英語表現、通訳演習(選択) 2・3年 第2外国語	四技能に均衡のとれた指導・活動を通じて、コースの 「特色」と生徒の「育成」を両立している
	5) 特別教室	CALL 普通 1年英語 (7・8・9組の少人数) 国際 2年LL演習 3年LL演習、総合英語、通訳演習、英語理解 LL2 普通 1年 英語 (1・2・3・4・7・8・9組の少人数) 2年 ライティング(1・2・7・8・9組の少人数) 国際 1年 総合英語 3年 中国語 LL3 普通 1年 英語 (5・6組の少人数) 2年 ライティング(3・4組の少人数) 3年 リーディング(文系、理系各1クラスの少人数)、 ライティング(文系1クラスの少人数) 国際 3年 英語理解、総合英語	CALLでは、インターネットを使用した授業が可能。 図書館と同時使用で、総合学習のアプローチが実現 LLでは、OCや専門科目でなくとも、映像と音声を通じて、現実性のある情報を提示し、授業への参加意欲を高めている(H15年7月全校調査)
少人数	1) 実施科目	1年 普通 英語 9/13 国際 英語 1/2、総英 1/2、OC 1/2 2年 普通 ライティング 9/13 国際 英語 1/2、英表 1/2、LL 1/2 3年 普通 リーディング 9/12、ライティング 9/12 国際 英理 1/2、総英 1/2、コミュニケーション 1/2	「少人数授業に満足か」(03年7月全校調査) 満足度44~35%、不満度2~8% 1年 英語 満足36% 不満8% 2年 ライティング 満足39%、不満5% 3年 リーディング 満足44%、不満3% ライティング 満足35%、不満4% まあ、支持されている
	2) 人数と学力	どの科目を何名程度のクラス編成で行うのが適当か不明のまま	コミュニケーション活動には、少人数は必要不可欠の環境

( - )	課題	対策	急
理想と現実の乖離	国公立二次・私大に向けた記述式試験対策の効果的方途	過去の事例を通じて、3年間の「指導の流れ」を蓄積し、成功例・失敗例に基づく理想的な方途を構築	
国公立の合格平均得点率 80% しかし校内平均 71%	CTの得点率向上 「あと1割」の指導！(70% 80%) リスニング導入に向けた対策	授業内でのCT対策を洗練 特別教室をさらに活用した授業・補習展開	
クラブ活動、7限授業、休日模試で、自由時間が減少したにもかかわらず、家庭学習時間を維持 生徒の心理的・身体的な衰弱が危惧	家庭学習に何を求めるのか？ 生徒の学習活動における家庭学習の位置づけは？	「学習意欲」の喚起と「課題」及び「小テスト」の整備	
事前に過去問配布 事後に解答配布 That's all.	将来役に立つ (= 大学入試で出る) ことを認識させる学習指導	定期考査・課題考査で応用問題を増やす (教科書・問題集と全く同じ問題の割合を減らす。模擬試験を授業進度に位置づけ、手引き書を確認する習慣を形成する) 入試・模試問題研究(教科) 英検の奨励と対策	
放課後の指導に利用できる時間の減少 390分(30単位) 270分(32単位) 210分(33単位)	英語科は十分やっているが、校内での認知度と位置づけが不明確	焦点(目標・対象・内容・時間)の明確な講座設定をこれからも目指す 生徒が意欲的に参加できる内容の研修	
問題研究: 資料(形式、難易度、採点法など)が不足 英語科として、組織的に行うべきか？	個別指導は重要だが、内容を効率化してスリムに指導できないか	英語小論文指導のマニュアル化 何を重視して指導し、何をさせるか	
授業 < 課題・小テスト 本末転倒を危惧	「させられている…」 「出せばよい…」 という気持ちにさせていないか？	意欲的な家庭学習に繋がる「量」と「内容」をめざす 授業と関連しない内容は、できるだけ避ける	
入学してくる生徒の変化 中学での学習内容の変化	入学前、入学直後に最も効果的な導入法は何か	単に「橋渡し教材」の選定に終わらず、生徒の状態を見て根本的な対応を図る	
理系への進学が不可 カリキュラムにより受験科目が限定される	国際コミュニケーションコースの特色・ねらいと、入学生徒の素養・希望と一致状況が不明	「文系」であることの説明を徹底 3年間の見通しを伴う、整合性のある教育課程の整備	
CTの場合、170以上は「運」の領域。他の科目で高得点を保障するべき	英語科の取り組みだけではどうしようもない	生徒の状況を知る「国際担任」を中心に他教科との連携を密にする	
なし (コミュニケーション重視の方途が、今のところマイナス要因とはなり得ない)	専門科目での目標達成を確保しつつ、ペーパーテストでの優位をどう保持するか	入試・模試問題研究(教科) 英検の奨励と対策	
生徒の資質に適合する水準の授業内容を展開した結果 進学後に「大学の授業が物足りない」という卒業生が出現 授業への積極的な参加が基本となり、クラス内の技量の差が明確に反映される	カリキュラムが経年により改まり、専門科目間の位置づけと繋がりが曖昧になってきた	国際コースの3年間を通じた指導目標と各専門科目の位置づけを再確認する ・生徒に身につけさせたいスキル ・基礎～発展への積み上げ 国際コース関連行事の充実と継続 ・スピーチコンテスト、国際交流合宿、高大連携講座など	
機器の故障・不具合があり、不完全な状態で授業をせざるを得ない 教材作成・機器準備に関わる時間・労力が、通常授業に比して多い CALL教室では、履修した教材を生徒が持ち帰り、復習することができない	特別教室の環境と機器を有効に使う方途が、教科内で十分研修されていない。従って、これらの性能が100%生かされている状態ではない。 担当授業等の制約により、特別教室の有効利用に熟練した職員の数が限られている	特別教室について、「その性能を最大限に発揮し、有効に利用する」という観点から、機器操作と授業形態に関する研修を行う 各教室あるいはすべての特別教室について、機器の管理、使用の許可、使用法の研修を手配する「特別教室管理者(CALL主任)」を任命する	
「他教科と比べてどうか」(同左調査) 満足度 26～15% 1年 英語 満足15% 2年 ライティング 満足24% 3年 リーディングとライティング 満足26% 支持されているといえるのか？ 授業運営、成績管理の複雑化 本務者以外の授業の増加	全校調査の自由記述部分より 少人数化することの意義の明確化 成果(利点・難点、生徒の意識)の確認	大人数授業との差異化を図り、少人数の利点を生かす ・少人数でしかできない授業内容・方法(個別演習、コミュニケーション活動など) 少人数授業を要求する根拠を収集する ・どの授業で何をするために必要か ・教科内の他の科目との関連はどうか	
科目あるいは授業内容によっては、「マスプロ式」の方が有効な場合も考えられる	必ずしも、最も適切な人数分割が実現しない	最適人数の割り出し 教務上の手続きと連携して善処	

「深く見つめる」ということは、時には「重箱の隅」をつつくが如き執念も必要かもしれない。

例えば、国公立大学に現浪併せて 180 名が合格という「瞬間風速」を記録した平成 14 年度のデータに基づいて、その当時の外国語（英語）科の指導に必要な課題をまとめると表 3 のような細かく膨大なものとなった。

「量的なデータ（数値データ）」のほとんどは進路指導室にころがっている。模擬試験の平均偏差値や生徒による自己申告の学習時間などは、その都度確認しておけばよい。むしろ、この量的なデータ、すなわち数字では判断できないことや、そもそも数字に頼ることが適当でない場合に求められる「質的なデータ」をどう収集して、どう活用するかが問題であるように感じる。

「質的データ」の宝庫はあちこちにある。教室、教官室、いや、そこの廊下を歩いているではないか。そこにいる人々との対話を通して、数字では見えない課題が少しずつ明らかになっていく。

とはいえ、やはり数字は大切である。

あくまでもこのような議論がなされると仮定しての話だが、仮に、「家庭学習時間が少ない」とか、「生徒が家で勉強をしなくなった」という問題を取り上げて改善策を話し合う際にも、いわゆる「勉強しない生徒」という実態を単なるイメージで論じてはならない。例えば、表 3 の「受験の 3）」の欄で「学習時間」を見ると、生徒の自己申告ではあるが、その前の年度よりも全学年で学習時間が 23 分～数分増えていることがわかる。

この年、生徒は週 2 回の 7 時間授業の導入で、放課後の自由に使える時間が少なくなったにもかかわらず、まさに「個人的な企業努力」で、なんとか家庭学習時間を捻出しているという可能性もないわけではない。

少なくともこのような実態を見ずしていきなり理想論に飛びつくなら、許容度を超えた筋力増強と投球練習を強いることで、かえって将来の名投手の道をスポイルしてしまうことにもなりかねない。勝つための許容度の設定は、ストライクとボールのぎりぎりのところである。

故に「重箱の隅」が無視できない。

というわけで、この年、平成 15 年度には、「受験」、「国際」、「少人数」という 3 つの大題目を立てて、現状・課題・対策の分類を図った。

様々な問題点のエッセンスを抜き出してみれば、意外と単純な結論に到達する。そして、急を要すると考えられる 3 つの問題点に到達した。表 3 の「急」の欄に見える 3 つの「 」である。

一つ目の問題点は「希望進路の実現」についてである。これについては、前節 - C . に示したとおり、継続的に心血を注ぐべき課題である。

二つ目の問題点は、国際コースの「専門科目」についてである。前節 - B . で触れたように、限られた時間（単位数）の中でいかに効率よく学ばせ、身につけたい力を身につけさせるかという問題である。そのためには、とくに国際コースでは「専門科目」での学習内容の「系統化」を図るという取り組みが絶対に必要であった。

この二つ目の問題点を放っておくと、まるでいつまでもモデルチェンジしない不人気車のようになり、悪くすれば市場から消えてしまう。また、モデルチェンジするなら技術革新もセットである。

三つ目の問題点である「少人数」は、上の一つ目と二つ目の両方をふまえたうえで「少人数」の利点を戦略的に活用するということである。さらに大人数の利点と予実管理の視点も見逃せない。多様な価値観が混在する時代にあって「大きいことはいいことだ」といつまでも言い続けるなら、それは白亜紀の恐竜の運命である。またその逆も同様である。

## - B . 系統化による伝統の継承

もう一度、「伝統」の話である。前節 - C . で述べた考え方をもう少しわかり難く（複雑化）すると、「伝統」のイメージには明らかに外側と内側があり、外側は「形式」、内側は「精神」と言い換えることができるかもしれない。少し皮肉を述べるなら、前者を継続するにはできるだけ思考を停止した方がよい。少しでも疑問を持つと、全体の調和を台無しにしかねない。反面、後者をいつまでも残るものにしようとするれば、その本質をいつも問い続け、決して思考をストップしてはならない。

自分でも本当にわかり難いと思うが、それはさておき、日々、年々状況の変わる教育の現場にあって、とりわけ「教え方」というものがその変化の洗礼を受けないわけにはいかない。

したがって、カリキュラムやシラバス続けさせようとするれば、その「形式や内容」は変化しても、受け継がれるべき「精神」、すなわち「舟入魂」や「国際スピリット」なるものがいつまでも根底に流れているのが理想である。

これが、「技術革新」を伴う「精神」の継承である。

さて、国際コースの「専門科目」がこれまで受け継いできた輝かしい実績という「伝統」をどう発展的に継承していくのかということである。

再び表3に戻る。現状を把握し、メリット（+）とデメリット（-）を追求した結果、国際コースの「専門科目」には以下のような課題と対策が導かれた。

課題：カリキュラムが経年により改まり、専門科目間の位置づけと繋がりが曖昧になってきた。

対策：国際コースの3年間を通した指導目標と各専門科目の位置づけを再確認する。

これを最も短く言えば、「系統化」が必要ですよ、ということになる。

「系統化」によって「舟入魂」や「国際スピリット」をこれから先も発展的に続いていく「伝統」として継承しようということである。

そもそも当たり前のことである。

「系統化」あるいは「体系化」という発想がなければ、「それぞれの部署で個々人が全力を尽くしてくれ」ということになる。例えば「性能のいいクルマ」を作るとして、エンジンはこれ、前のデザインはこれ、後ろはこれ、内装はこれ・・・と別々の担当者が思い思いの「最高」や「最適」を持ち寄って組み合わせたところで、確かにそれぞれの機能としてはよいかもしれないが、決して「美しい」製品には仕上がらないと思う。性能やデザインに統一感のないクルマでは「魅力がない」から誰も乗らない。

カリキュラムには生徒が乗る。乗り込んでシラバスに着席する。そして、教師が運転する。

どうせなら、それにふさわしい乗り物であってほしい。

故に、「系統化」が必要なのである。

しかし、何をどうすればよいのか。この時点ではほとんどわからなかった。



- C . 「英文法」VS「コミュニケーション」

「わからないから、できない。そして、できないから、やらない。」というわけにはいかない。生徒の指導と同じである。では、「できることからやってみよう」ということになる。

ここで 100%の賛同を得るとは思わないが、こと英語を教えるという分野の中で、最も体系化・理論化の進んでいるのはおそらく「英文法」だろう。單元ごとに理解すべき内容もはっきりしているし、物語や論説など、扱う素材に依存しないので、数学や理科のように学習する内容に普遍性がある。

「英文法」を中心になら、試みに体系化を考えることができるかもしれない、という感じだった。

もう一つの軸は「読む」・「聞く」・「書く」・「話す」という4技能である。これに「語彙の充実」と「大学入試での出題パターン」を加えると、指導分野のかなりの部分を網羅できる。

昨今は、「英文法」を中心に指導することはできるだけ避けるという風潮がある。これは「英文法」がそれだけで独立した指導の分野になることは難しく、実際には「読むための文法」、「書くための文法」、入試問題を「解くための文法」など、もう一つの軸と関連して学習しないと、「英文法」が単なる知識で終わってしまい、実用にまで結びつかないからである。

その意味で、これまである程度の実績をあげてきた本校の「英文法」の指導について、目に見える形で「系統化」を試みる必要があった。これは、表4-1と4-2に示すとおりである。

授業科目ごとに「4技能」と「英文法」の取り扱いについて関連性を持たせるよう、当時行われてい

表4-1

英語科 系統化の構想図(普通コース)

『文法の扱いについて』

	単 位	読む	聞く	書く	話す	文法
1年	英語	3・教科書を読む		課ごとにエッセイ、要約など(段階的に50~200語)		・英文を通して文法にふれる
	OC	3・ <u>文法副教材で学ぶ</u>	・リスニング演習 ・教科書で学ぶ(説明を聞く、会話する)	・課題エッセイ(休業中) ・スピーチ原稿	・会話、スピーチする	【読むための文法】文法副教材を用いて、單元ごと、 <u>ていねい</u> に学ぶ(1年次~2年1学期)
2年	英語	3・教科書を読む				・英文を通して文法にふれる
	ライティング	2		教科書で書く		【書くための文法】ライティング教科書で、文法の單元ごとに復習する
3年	リーディング	3・教科書を読む ・過去問を解く(英文)				・英文を通して文法にふれる
	ライティング	2		・過去問を解く(文法・作文・語法)		【解くための文法】マーク型、記述型の実戦用の過去問集で、文法單元ごとに復習する
	英語	2・英文を読む(速読) ・過去問を解く				・英文を通して文法にふれる

た授業の内容を基にならべてみたものである。

こうしてみると、「普通コース(表4-1)」については、受験のための指導を段階的に追っていくという点で、比較的バランスの取れた配列が可能であるように思われた。

その一方で、「国際コース(表4-2)」については、このような文法指導の配列を確認しただけではとうてい「系統化」に結びついたとは言えない。

科目数と単位数が多い割に受験のための指導以上のもの、つまり、英語を「書ける」、「話せる」、「使いこなせる」、「べらべらになる」という、本校を選んで入学した生徒が心に抱き続けてきた夢や希望が織り込まれていないのだ。

何か肝心の「軸」が決定的に抜けているように思えた。

このような問題意識から出発した SELHi では、現在、例えば「音読」、「暗誦」、「即興」といったトレーニング型の学習活動をもう一つの「軸」として導入することで、この問題点を克服しつつある。

ということで、いよいよ SELHi である。平成 15 年度までの以上のような取り組みと、それから見出される問題点は、ある程度は整理されていた。

しかし、これを改善するとなると何か「強烈なきっかけ」が必要だった。SELHi である。

表 4 - 2

英語科 系統化の構想図(国際コミュニケーションコース)

『文法の扱いについて』

	単 位	読 む	聞 く	書 く	話 す	文 法	
1年	英語	3	・教科書を読む			・英文を通して文法にふれる	
	OC	2		・教科書で学ぶ(説明を聞く、会話する) ・リスニング演習	・スピーチ原稿 ・課題エッセイ	・会話、スピーチする	・エッセイの添削などを通して文法にふれる
	総合英語	2	・副教材で、「読む」に必要な文法を学ぶ		・副教材で、「書く」に必要な文法を学ぶ(冠詞など)		【読む・書くための文法】文法副教材を用いて、単元ごとに学ぶ
2年	英語	3	・教科書を読む			・英文を通して文法にふれる	
	英語表現	2			・エッセイライティング ・文法課題、小テスト	・スピーチ、ディベートする	【書くための文法】書くための文法を課題や小テストを通じて演習する
	異文化理解	2		・リスニング演習		・ディスカッション	・文法を意識しながら、意志疎通する
3年	英語理解	3	・副教材を読む		・トピックについて書く	・ディスカッション	・英文で文法にふれる ・文法を意識して意志疎通する
	総合英語	2	・副教材を読む		・過去問を解く		【解くための文法】過去問を解く
	コミュニケーション	2		・リスニング、ディベート、ディスカッションする		・スピーチ、ディベート、ディスカッションする	・英文で文法にふれる ・文法を意識して意志疎通する
	英語表現	2			・エッセイライティング(2000語以上レベル)	・スピーチ、ディベート、ディスカッションする	・英文で文法にふれる ・文法を意識して意志疎通する
	外国事情	2	・副教材を読む		・トピックについて書く		・英文で文法にふれる ・文法を意識して意志疎通する
	通訳演習	2		・リスニングする		・通訳する	・英文で文法にふれる ・文法を意識して意志疎通する

## - D . 「強み」を生かして「強み」を増やそう

問題意識は比較的はっきりとしていた。しかし、それを解決するとなるとそれなりに勉学を重ねる必要があったのだと思う。

タイミング良く市教委からの打診があり、SELHiはこの問題意識をぶつけてみるよいチャンスのように思えた。しかし、文部科学省への応募に際してA4版十数ページに及ぶ「申請書・計画書」をしたためるにあたって、研究という遡上に載るほどの具体的な「改善策」や研究する価値のある「理論的背景」などはなかった。

SELHiの指定が始まったのは平成14年度からである。平成16年度の指定に応募して決定されれば、SELHiの第3期校ということになる。

ということは2年分の先輩がいるのだ。

何事も自分が「ゼロから立ち上げた」と言えば聞こえがよいが、実際に「ゼロから」というのは他に世界中のどこにも参考になるものがない場合に限られる。参考となる先人、先輩の足跡をたどり、その功績の上に自らの方向性を上乘せしてはじめて、「効果的なオリジナリティー」となるのではないか。

ただし、まる写しの「まね」やまるごと「コピー」は惨めである。先人、先輩に敬意を払う限り、オリジナルのアイデアに対する畏敬の念を失ってはならない。

これまで何頁も述べてきた先人、先輩の足跡はあくまでも校内のことであり、SELHiが全国を対象とする取り組みであることを考えるととても狭い世界である。

そして、もうすでに広い世界で2年も頑張っている先輩がいた。岡山県の城東高等学校である。

これまで持ち続けてきた教科内の問題意識を具体的な「解決策」や「研究内容」に繋げたいという思いでの学校訪問であった。当時の国際コース1年生の担任であった横山先生の口利きで、同じく国際コース2年生の担任であった住田先生、そして私こと教科主任の西の3人で出かけた。

城東高では、横山先生の友人の小橋先生（SELHi研究主任）が、2時間以上にわたる説明や案内をしてくださった。SELHiの第1期校として、いわば「ゼロからの出発」をしたにも関わらず、「スピーキング能力の伸長」というシンプルかつ明確な目標を授業と英語キャンプなどの活動を通して実現しようとするなど、しっかりと「研究」の体をなすすばらしい取り組みであった。なかでも評価規準やシラバスの作成など、一見地味ではあるが教育活動の基本として重要な部分がしっかりと押さえられていた。

最高の先輩との出会いであった。

「このようなことが我々にもできるのか。」

学校訪問の帰り、新幹線の中で3人ともため息をついた。セルフの讃岐うどんを食べた後だった。

舟入高の生徒のため、自分たちに何ができるのか。生徒の夢や希望の固まりを大事に育てたい。そういう思いで話し合った。

「城東高にないものは何だろう、そしてうち（舟入高）にはあるものは。」

「うちの強み、舟入の。」

「・・・」

「まあ、書くこと（ライティング）はできるよね。」

誰がどのセリフを述べたかは覚えていない。だが、その後3年間何をやっていくかは意外に短時間で決まった。新幹線はすぐに広島に着く。

ということで、「書く力（ライティングの力）」を基本において、「話す力（スピーキングの力）」を伸ばす。書くためには「思考力」が必要なので、「議論する力」もセットで研究していこう。そして、「書けるようになった」、「話せるようになった」という充実感と笑顔で卒業させよう、となった。

今度は、具体的な研究構想である。これが稚拙では指定などとれない。

研究指定校の榮譽（と労苦）は空から降ってくるのではない。研究経費を支出するに値するプレゼン

テーションが必要である。3年間で1,000万円の予算に値する研究計画書を書かなくてはならないのだ。

研究構想と同時進行で「運営指導委員」の先生方を捜す必要もあった。市教委と相談して、連携先は同じく市立の広島市立大学、青木信之教授（現・同大学副学長）をお願いをした。

上に述べたような「ライティングからスピーキングへ」というおおざっぱな研究構想を告げると、青木先生は年末年始の忙しい時期にもかかわらず、非常に貴重なアドバイスを次々と与えてくださった。

この貴重なアドバイスがなかったら、今頃は確実に錐揉み状態の危険なフライトとなっていたに違いない。本当に幸運である。

またこれと同時進行で教科内での打ち合わせ、プレゼンテーションなど、すべて急ピッチで行った。約3週間程度の期間を費やして、冬季休業、正月、成人の日……。一日も無駄にできなかった。いや、元旦だけはゴルフに行った。

研究開発計画書（申請書）を提出した。二ヶ月後の3月末、指定の内示があった。3年間、42.195kmフルマラソンの始まりである。走る人、歩く人、立ち止まる人、転げる人、やめる人……。翌日の新聞に載るマラソン記事の大きなカラー写真のように、「今スタート」というシーンが脳裏を駆けめぐった。

#### (4) 国際クオリティーの波及効果 【未来】へ (TO The Future)

「で・・・で・・・出たんです。」

卒業式の前日、国公立大学の前期試験を終えた3年10組の生徒が、本当に興奮して話してくれた。横山先生と計画した公開研究授業（平成17年10月28日）で行った「トークン・マッチ」の討論テーマ、『小学校からの英語教育の是非』が早稲田大学国際教養学部の入学試験問題の「英語小論文」で出題されたというのだ。もちろん「合格した」との知らせである。

受験のための指導においては、補習などで扱った「英文読解」の素材文が的中することもめったにはあるが、ないわけではない。しかし、おおかたの予想に反して、もし素材文が的中すれば、たいていの場合、生徒は自分が読んだことのある英文が出題されたことに驚いて、舞い上がってしまう。当然だが、下線部訳などの設問はその都度異なるので、あまりよい結果にならないことが多いようである。

それは、「英文読解」があくまでも受け身の学習の定着度を確認しているに過ぎないからである。

その一方で、最近「自分の意見を述べること」が入試問題にもますます多く出題されるようになってきている。身につけた知識・技能を実際に使用できるまで、積極的・能動的に学習した生徒かどうかを確認する問題である。

現代社会に潜む問題点を直視し、わからないことは自分で調べて理解しながら、「自分の意見を述べる」レベルまで高めた知識は、決して色あせることはない。どのような角度から切り込んでも、自分なりの答えを導き出すことのできる判断力へと昇華するのだ。

本校では同じく文部科学省の学力向上フロンティアハイスクールの指定校として取り組まれてきた「ABLE TIME（教育研究部）」、そしてもっと以前から生徒との対話とカウンセリングを通して大学入試に堪える情緒と思考力を育ててきた「小論文個別指導（進路指導部）」など、学校全体で生徒の根本的な人間力を高めようとする土壌がすでにある。

「合格した」という生徒の例は説得力を持つ。しかし、これまでも広島市立大学の『原子力の利用について』を的中させた福崎先生など、コミュニケーション系の専門科目を担当してきた先生方はますますこのような積極的な表現能力が試される時代になっていることを肌で感じている。

言い過ぎになることを承知で敢えて言うなら、このような授業を日常的にラインナップしている『舟入高の英語教育』を受けている生徒である。いや英語だけではない。舟入高の生徒であることを誇りに

思い、すべての教科について、朗らかに学習を続ける限り、外に出ても「絶対に負けない」水準の人間力を身につけていると信じている。

いわば「国際クオリティー」とでも呼ぶべき、「絶対に負けない」水準の人間力を「国際コース」の生徒たちは日々の学習を通して身につけていくよう運命づけられている。

もうすでに「あれ？」と思われるかもしれないが、これまで「舟入高の生徒」について記述した中で、敢えて「普通コース」と「国際コース」を区別せず論じた部分がある。どちらを指すのかは読み手の判断に任せたいが、「国際コース」の今の姿はおのずと「普通コース」の未来の一部である。

一つの学校の中に2つのコースがあり、片方のクオリティーが上がれば必ずもう一方にもよい影響が及ぶ。人間の集団はシーソー天秤ではない。互いに影響を及ぼしあいながら、共に向上できるのである。逆もまた真である。

したがって、「普通クオリティー」なるものも存在する。「普通コースなのに英語がすごい生徒」とか、「数学 までがんばって高得点をとる理系の生徒」など、「国際コース」の生徒には気になる存在である。

これと同じく、学年ごとに1クラス、「国際コース」があることの意義は大きい。他の9クラスの生徒たちは、自分たちとは異質なモチベーションを持つ集団に羨望したり脅威を感じたりするだろう。そして直接目にするとは限らないが、スピーチコンテストやユーロスコラなどで活躍する生徒が学舎を同じくすることは、たとえ平穏に見えても、「普通コース」の生徒にとってはかなり気になることのはずである。

この先もこの「国際クオリティー」がうまく保たれて、「普通コース」を含む学校全体が活性化されることの意義は疑いないことと思われる。そしてこのクオリティーを、技術革新を伴いながら、いつまでも保ち、発展させるためのSELHiであり系統化である。

そしてこのクオリティーを引き継ぐのは「ヒト」である。21世紀を生きていく「生徒」たちである。

## (5) いま、足下を振り返ると 【現在】 (The Present Tense)

過去を思い出すということは、異国への長旅に出るに等しい現実逃避にもなり得る。

旅の途中で、夢見るがごとき理想論や暴論を記したことをお許し頂きたいと思う。

例えば、『舟入高の英語教育』などという唯我独尊的なネーミングは、言い過ぎであると思う。そもそも「教育」は「優れている」などと形容・評価されるものではない。「優れている」のはある種の教育を受けた結果、自らの努力と幸運に恵まれて素晴らしい能力を身につけることができた「生徒たち」である。今まで『英語教育』を云々しておいて、無責任すぎる自己矛盾ではないか。ここでしっかりと譲歩したい。

さて、現在のところSELHiは、研究開発の期間である3年間のうち、2年目が終わろうとしている。本稿では研究の内容そのものには全く触れず、その前後に焦点を当てて、本校の発展を願う気持ちに端を発する取り組みであることをできるだけポジティブな言葉で表現したつもりである。

しかし、本来SELHiは、『日本の英語教育を変える』というつもりで取り組まなくてはならないそうである。ボトムアップかトップダウンか知らないが、「わが舟入高の中」ですらできないことが「他の学校」や「全国の学校」でできるはずがない。たとえインターハイを目指すとしても、地区大会で負ければそれでおしまいである。

『日本の英語教育』云々を言う前に、まず我が校から、そしてまず「国際コース」から、ということ

である。

したがって、途中で SELHi のことから脇道にそれた観があるが、これも当然である。「国際コース」の系統化に端を発する本校全体の発展への道筋を思案したまでである。

以上、本校の外国語（英語）科、SELHi 委員会の委員の先生方、国際部の先生方などなど、各方面の先生方のご支援により継続している SELHi 事業について、ご理解を賜ることができれば幸いである。

手厳しいご批判も甘んじて受けたいと思う。できればお手柔らかに。

(6) 引用文献 (Reference) \_\_\_\_\_

なし。内容は関係者との対話に基づく。

なお呈示資料は、すべて外国語（英語）科の教科会で使用したもの。